

## 中国史いろいろ 『水滸伝』の豪傑達

戸田奈緒子

中国四大奇書といわれる『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』。奇書、とは奇妙な本、ではなく「世にも稀なほど卓越した書物」という意味になります。『金瓶梅』の代わりに『紅樓夢』を入れたものを四大名著といい、昨今の中国ではこちらの方が一般的です。

『水滸伝』の水滸、とは水のほとり、という意味です。梁山泊、という現在の山東省西部辺りにかつて存在した大沼沢地に、宋江を首領とする豪傑達が集ったことから、その名があります。舞台となるのは、北宋末、徽宗皇帝の時代です。徽宗皇帝は、「風流天子」と称されるほど芸術家として極めて優れ、その業績たる書画は現在も残されています。ただ、政治家としては甚だ無能であり、『水滸伝』においても武官であった青面獣楊志が没落する原因となった、造園用の花石綱（珍花・名木・奇石など）を求め、自らの芸術活動のために作中でも悪役として登場する宰相の蔡京や宦官の童貫を重用して重税を課すなどした結果、各地で叛乱を招いた末に北方の女真族が興した金に侵攻されて、首都開封は陥落し北宋は滅んでしまいます。宋江は、山東で実際に反乱を指揮した人物で、『水滸伝』は、この史実を下敷きに発展した講談などから明代に成立した小説です。

南宋末元初に書かれた周密の『癸辛雜識』に龔聖与の「宋江三十六賛」が載せられており、北宋滅亡を描いた物語である『大宋宣和遺事』にも宋江の仲間として三十六人の名が見られます。『水滸伝』では三十六人の天星星と七十二人の地煞星、と数が膨れ上がっていますが、これは『水滸伝』の成立過程において、豪傑達が「天に替わりて道を行く」ために天上に列せられた星辰が生まれ変わったもの、とされたからです。なので豪傑達は、それぞれ綽名の他に星の名を載っています。例えば、宋江は「天魁星呼保義宋江」です。

百八の豪傑達の持つ綽名には、没羽箭張清や双鞭呼延灼、双槍將董平のように得意とする武器の名を冠したもの、智多星呉用、神行太保戴宗、神機軍師朱武のように特技からきているもの、霹靂火秦明、急先鋒索超、拚命三郎石秀のように性格からきているもの、など由来は様々ですが、中には歴史上の人物の

名を冠するものもいます。

三国志関係はやはり多く、美髯公朱全は関羽と外見的特徴を同じくするのですが、大刀関勝は姓の通り、関羽の子孫を称し綽名の大刀も先祖と同じ青龍偃月刀を用いることから来ています。豹子頭林冲は張飛になぞらえられ、武器も同じ蛇矛です。病関索楊雄は、『花関索伝』の主人公で関羽の三男とされる（架空の人物）関索から、小温侯呂方の温侯とは呂布のことです。綽名ではなく本名ですが、毛頭星孔明と独火星孔亮という兄弟は明らかに諸葛亮を意識しているでしょう。

それ以外にも、小李広花榮は漢代に弓を得意として「飛將軍」と讃えられた名将李広、小霸王周通は西楚の霸王項羽、病尉遲孫立・小尉遲孫新は唐の凌煙閣二十四功臣の一人である尉遲敬徳（名は恭）、賽仁貴郭盛は唐代に高句麗討伐や突厥討伐で活躍した薛仁貴（名は礼）、といったように過去の武将達への親しみを寄せられたような名が見られます。

『水滸伝』は、前半部分は義士銘々伝として、個性豊かな豪傑達が各地で活躍し、次第に梁山泊に集結していきます。ただ、全員が揃った後の後半部は遼（契丹）国遠征、そして方臘の叛乱の討伐で大半の豪傑達が死んでしまい、いささか精彩を欠きます。明末清初の文学批評家である金聖嘆が後半を切り取った版本を作ってしまうほどです。しかし、『水滸伝』の成立には史実の方臘討伐に盗賊の宋江とは別人の、將軍宋江が実在していたであろうことも関係があり、それでは全体的な筋が通らなくなるため、やはり物語的には必要だと言われています。

前半は貪官汚吏を叩きのめした豪傑達が、後半では一人、また一人と脱落していく様は悲劇的です。そのギャップもまた、『水滸伝』の魅力といえるでしょう。

## ■参考文献

吉川幸次郎、清水茂訳 『水滸伝：完訳』全10巻（岩波文庫）

とだ なおこ（司書・管理運営課）